

令和元年6月25日現在

機関番号：37104

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K09632

研究課題名(和文) 発達障害への包括的治療法によって母親養育レジリエンスは改善するか？

研究課題名(英文) Does maternal resiliency in rearing children with neurodevelopmental disorders improve by comprehensive treatment?

研究代表者

山下 裕史朗 (YAMASHITA, YUSHIRO)

久留米大学・医学部・教授

研究者番号：90211630

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：1) Summer Treatment Program(STP)前後の養育レジリエンス尺度(PREQ)の変化：平成27～29年にSTPに児童が参加した65名の母親PREQ得点のSTP前後での比較は、PREQサブスケールの知識および社会的支援が有意に改善していたが、肯定的な捉え方は有意差を認めなかった。2) トリプルP前後のPREQの変化：平成27年からのトリプルPとPREQ得点変化を78例で追跡し、PREQサブスケール3項目すべての有意な改善を認めた。STPおよびトリプルPは、母親PREQ得点を改善させる、すなわち母親の養育レジリエンスを向上させる効果があることがわかった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

我々の開発した養育レジリエンス尺度(PREQ)を用いて、子どもおよび母親への治療・介入すなわち、サマートリートメントプログラムやトリプルPによって、母親の養育レジリエンスが改善するかを本研究で初めて明らかにした。治療・介入前にPREQによって母親の養育レジリエンスをあらかじめ評価し、介入・治療によって母親の養育レジリエンスがどう改善するかの評価が可能になり、将来的には、母親の養育レジリエンス・プロフィールに応じた最適な介入・治療法を開発することが可能になり、社会的意義が大きい。

研究成果の概要(英文)：The parenting resilience elements questionnaire(PREQ) in 65 mothers whose children participated summer treatment program(STP) during 2015～17 significantly improved in subscales; "knowledge of child's characteristics", and "perceived social supports", but did not improve subscale in "positive perception of parenting".

The PREQ in 78 mothers who participated "Triple P" parent training program showed significant improvement in all 3 subscales of PREQ.

These results suggested that both STP and Triple P were useful in improving maternal resilience of children with neurodevelopmental disorders.

研究分野：小児神経学、小児科学

キーワード：養育レジリエンス 発達障害 パARENTトレーニング サマートリートメントプログラム 注意欠如  
多動症 自閉スペクトラム症

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

ADHDや自閉スペクトラム症(ASD)、限局性学習症(SLD)は、通常学級学童の6.5% (2012年文科省調査)に認められる神経発達症である。診断の遅れや不適切な対応・治療によって、二次障害が発生し、社会的適応が困難になり、社会経済的にも大きな損失を与える。養育環境は二次障害に関係する大きな因子である。子どもに神経発達症があり育てにくい子どもであるにも関わらずうまく困難に対応できる母親すなわち「養育レジリエンスが高い母親」の特徴は、積極的で前向きな性格、子どもの状態を客観的に捉え、丸ごと受け入れる態度、母親の周囲とのコミュニケーション能力などが報告されている。申請者は、厚生労働科学研究補助金「発達障害を持つ家族の支援ニーズに基づいたレジリエンス向上に関する研究」(主任研究者：稲垣真澄)の研究分担者として、ASDをもつ母親の養育レジリエンスの構成要素に関する質的研究を行い、親意識、自己効力感、特徴理解、社会的支援、見通しで構成される養育レジリエンスのモデルが想定できた。養育レジリエンスを客観的に評価する養育レジリエンス要素質問票(PRQ)を完成し、臨床現場での応用を始めた。

申請者は、米国NIMHでのMTA研究でも用いられたADHDの包括的治療プログラムであるSummer Treatment Program (STP)を米国のペラム教授らと2005年に米国外で初めて福岡県久留米市で開始した。10年以上の実践を通じて、わが国の医療・教育現状にマッチした2週間プログラムを完成した。過去300名以上の学童が参加し、STPのADHD児の行動改善に関する短期効果や認知機能、NIRSによる逆ストループ課題中の前頭葉脳血流改善について報告してきた。また、ASDを併存したADHD児へのSTPの効果に関しての研究も行い、ADHD単独児と同等の行動改善効果が認められることを報告した。STP前後の保護者への質問紙として、日本語版POMS (Profile of Mood States)、Home Situation Questionnaire (HSQ)、Kid-KINDL保護者版等を用いてポジティブな変化を報告してきたが、母親の養育レジリエンスの変化を明らかにした国内外の研究がない。ストレスを反映する唾液中のCortisol Awakening Response: CARもSTP前後で保護者およびADHD児童で検討してきた。STP参加児のSTP前のCARは消失しており、STP参加後には改善すること、母親のCARもSTP後に改善することを見いだした。

申請者らは、豪州クイーンズランド大学のサンダース教授により開発されたペアレントトレーニングで、そのエビデンスが証明されWHOも推奨するトリプルP-前向き子育てプログラムを平成26年10月から久留米大学病院で開始した。トリプルPは、30年間に及ぶ研究結果から子どもの行動改善のみならず、子育て技術、親の幸福度、子どもへの虐待発生率減少などの効果が示されている。トリプルP前後における養育レジリエンス検討は報告がない。

### 2. 研究の目的

発達障害児の予後改善には、本人への治療・介入に加えて、本人を取り巻く環境因子を含めた介入、とりわけ養育の中心的役割を果たす母親のメンタルヘルスの維持向上が重要である。本研究の目的は、我々の開発した母親の養育レジリエンスの客観的評価法を用いて、子どもおよび母親への治療・介入によって、母親の養育レジリエンスが改善するかを明らかにすることである。さらに母親の養育レジリエンスおよび改善に関わる因子を明らかにすることで、母親の養育レジリエンス・プロファイルに応じた最適な介入・治療法を開発することが可能になる。

### 3. 研究の方法

用いるエビデンスに基づく治療介入法は3種類で、1)ADHD児へのSummer Treatment Program (STP)、2)母親へのトリプルP(ペアレント・トレーニング)、3)薬物療法である。1)と2)についてそれぞれの治療前後で養育レジリエンス尺度を用いて、母親のトータルレジリエンス

と親意識、自己効力感、特徴理解、社会的支援、見通しで構成される養育レジリエンス・プロフィールを評価する。薬物療法は STP 参加児や母親がトリプル P に参加している児童の約半数が内服をしている。STP およびトリプル P 前、期間中、後を通じて内服量を変えないようにした。各治療法の児童および母親への効果は従来行ってきたさまざまな質問紙や脳機能検査、唾液中の Cortisol などの客観的指標を用いて行う。毎年 8 月に STP を実施（毎回の参加者 12 名）。トリプル P は、神経発達症をもつ母親を対象に年に 2 回実施した。レジリエンス尺度は、STP では、前・後・フォローアップの 3 ポイントで、トリプル P は、前・中・後の 3 ポイントで評価した。

#### 4．研究成果

1) STP 前後の養育レジリエンス尺度の変化：平成 27～29 年に STP に参加した 65 名の母親の養育レジリエンス要素質問票 (PRQ) 得点の STP 前後での比較は、知識および社会的支援が有意に改善していたが、肯定的な捉え方は有意差を認めなかった。肯定的な捉え方に有意差が認められなかったのは、もともと STP に参加する母親が肯定的なお捉え方をしている母親が多い可能性が理由として考えられた。STP 期間中に母親へのペアレント・トレーニングも実施しており、STP による参加児の行動改善と同時に母親の子どもへの理解が進み、様々な支援を受けていることがより実感できたために PRQ 得点が改善したと考えられた。

2) トリプル P 前後の養育レジリエンス尺度の変化：平成 26 年スタートのトリプル P 受講前・後・6 か月後の養育レジリエンス要素質問票得点を検討し、介入グループでは受講後、養育レジリエンス要素質問票 (PRQ) 得点や子育てスタイル、SDQ は有意に改善し、未介入グループでは変化ないことを報告した。また効果は 6 か月後も持続した。就寝前唾液中 cortisol, 起床覚醒反応も PT9 週間時に改善を認めた。さらに平成 27 年からのトリプル P と養育レジリエンス要素質問票 (PRQ) 得点の変化を 78 例で追跡し、PRQ サブスケール 3 項目すべての有意な改善を認めた。特に得点が、前半のグループ学習から後半の個別指導に移行した後にさらに伸びており、養育レジリエンスの改善には、ファシリテーターとのマンツーマンの指導の重要性が示唆された。

1), 2) の結果より、STP およびトリプル P は、母親の養育レジリエンス要素質問票得点を改善させる効果があることがわかった。STP に関しては、STP 期間中のペアレント・トレーニングに参加していなかった母親（以前に別のペアトレを受けている母親もいる）と参加した母親との比較が今後必要である。

#### 5．主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 1 件)

1. Okabe R, Okamura H, Egami C, Tada Y, Anai C, Mukasa S, Iemura A, Nagamitsu S, Furusho J, Matsuishi T, Yamashita Y. Increased cortisol awakening response after completing the summer treatment program in children with ADHD. Brain Dev. 2017;39(7):583-592.

〔学会発表〕(計 3 件)

1. 江上千代美, 田中美智子, 山下裕史朗. 発達障がい児をもった母親の養育レジリエンス向上に向けた支援～母親の変化と子どもの行動～第 24 回日本 LD 学会, 佐賀, 2015 年.
2. Egami C, Yamashita Y. The effect parenting resilience and triple P intervention, Asian and Oceanian Congress of Child Neurology (AOCCN) 第 14 回アジア・大洋州小児神経学会, 福岡, 2017.
3. Egami C, Tanaka M, Yamashita Y. THE IMPACT OF TRIPLE P ON PARENTING RESILIENCE OF CAREGIVERS WITH CHILDREN WITH DEVELOPMENTAL DISABILITIES, 22nd East Asian Forum of Nursing Scholars (EAFONS), Singapore, 2019.

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

取得状況(計 0 件)

〔その他〕

ホームページ等

## 6. 研究組織

### (1) 研究分担者

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号(8桁)：

### (2) 研究協力者

研究協力者氏名：江上，千代美

ローマ字氏名：EGAMI，CHIYOMI

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。